

ごあいさつ

私のこの「ごあいさつ」は今回の『研究集録／実践報告 No.52』で、8回目となります。

今年度もすべての応募原稿を読ませていただきました。今回は例年にも増して、職員一人ひとりの皆さんが、そして職員全員がチームとして、一生懸命に利用者のことを我が事として考え、本人の気持ちを、その心理を追求し、日頃の利用者支援での努力と工夫に力を注いでいると感じました。

例えば、利用者が「児」の頃から将来の「者」に至る時を見通した支援の大切さ、重要性。そのことへの言及。強度行動障害へのアプローチ。発達障害へのアプローチ。地域貢献への取り組み。ダイエット解消への取り組み。高齢化における残存機能の維持。利用者の自治会活動。児童期から関わってきた利用者のこと、等々。それらのテーマは現在、私たちが取り組んでいる課題や願いを見事に反映したものとなっています。

しかしながら、それぞれの文章表現は果たして人に理解してもらえるような書きぶりとなっているだろうか。その書き方で人は理解してくれるだろうか。その写真や表は分かりやすいものになっているだろうか、との振り返りを敢えて皆さんに促したいと思います。テーマや着眼点、努力や工夫など取り組む姿勢はいいのに、残念ながら、読み手に伝えるための文章力が不足していて、今一つしっかり伝えられていないのではないかと思われるものもありました。このことについては今後の皆さんの努力を期待します。

職員の皆さんの考え方が、利用者だけに努力を強いるのではなく、自分たち職員こそが努力、工夫し、利用者の生活環境、作業環境を整えていくことが求められている、ということきちんと理解し、それが支援現場で実践され始めていると感じました。

利用者が出来ないことをただ叱咤して、出来るようにしようとすることは支援ではないのです。私たち障害児者福祉に携わる者の支援はそんなところにはありません。

この『研究集録／実践報告 No.52』には各会員施設・事業所で努力、工夫を重ねるたくさんの職員の皆さんの姿があります。読んでいて大変心強く思いました。そして何より、皆さんは利用者からたくさんのお話を教えてもらい、そこで学んでいます。是非、この『研究集録／実践報告 No.52』の内容を全会員施設・事業所で共有し、さらに発展させていきたいと切に願うものです。

最後になりましたが、本『研究集録／実践報告 No.52』にご応募いただいた会員施設・事業所の皆さん、そして日々利用者支援に携わり、お忙しい中、編集・発行にご尽力いただきました主幹施設・事業所並びに編集委員の皆さんに、心より厚く御礼申し上げます。

令和元年11月

一般財団法人 山口県知的障害者福祉協会
会長 古川 英 希